



葛山城跡と 葛山落合神社



葛山城は芋井地区大字鑪の葛山にあり、第2回川中島合戦の際に上杉方が築いた城です。城将は村上氏配下の落合氏(備中守と伝わる)で、葛山衆と称する武士たちが守っていましたが、弘治三年(1557)武田軍に攻められて落城しました。米を水に見せかけて敵の目を欺いたという、米山城伝説が伝えられています。

葛山落合神社は岩戸集落にあり、杉の大木をもった社叢の中に鎮座しています。建武年間(1334~1338)にこの地の豪士落合氏が勧請したと伝えられています。本殿はこけら葺きの一間社隅木入春日造りで室町時代後期の建築とされ、附棟札1枚は国の重要文化財にも指定されています。



隠滝と隠滝不動尊



隠滝は上ヶ屋字隠畑地区の達橋沢にかかる滝で、高さは約30メートルあります。かつては扇型の幅の広い滝でしたが、現在は大きく二股に分かれています。

また、隠滝の滝つぼそばのお堂には隠滝不動尊が安置されています。明治初年に仏像廃棄の厄により御本体が地下に失せてしまいましたが、信者の夢枕に再建を告げられ、明治30年に現在の不動明王とお堂が再建されたといわれています。不動明王は高さ約4.5メートルの木造で、体内には信者一同の氏名が納められていると伝えられています。毎年5月15日には不動尊祭りが行われ、現在も多くの人々が参拝しています。



三十三燈籠献灯祭



毎年8月9日に篠ノ井塩崎で行われている献灯祭です。江戸時代、干ばつに苦しんだ塩崎山崎区の人々が一戸1灯の燈籠を献じ雨乞いをしたとされています。三十三という数字につ

いては「観音信仰の三十三化身になぞらえたもの」「当時この地区の家数が33戸であったから」など様々ないわれがあります。

午前中より山崎区の公民館に集まり準備をした後、夜9時前にまた公民館へ集まります。そして11メートルほどの船形灯籠を横にして長谷寺へと走り抜けます。仁王門に勢ぞろいしたところでまた参道石段をかけ上り、灯籠を観音堂の石垣下に立てます。長谷区の獅子舞が奉納され、終了と同時に灯籠を倒して氣勢よく運び去り、祭りは終わりとなります。



川柳將軍塚古墳



篠ノ井石川にある川柳將軍塚古墳は5世紀初期、大和国と直接交流のあった豪族が築造した前方後円墳です。全長92メートル、前方部幅31メートル、後円部径42メートル、高さ8.4メートルの長野県内最大規模で最も古い時期の古墳になります。



後円部は寛政12年(1800)に農民によって発掘されていて、長さ5.4~7.2メートル、幅1.8メートルの竪穴式石室がもうけられ、内面は朱に塗られていたと伝わっています。また、鏡・筒型銅器・玉類など多くの遺物が出土しています。

大正12年に保存会が設立され、毎年地元区民が手入れを行い美観を保っています。



姫塚古墳



篠ノ井石川の川柳将軍塚古墳と同じ尾根の約200メートル北、30メートルほど高所に姫塚古墳があります。5世紀初期に築造された前方後方墳で、全長31メートル、後方部幅20メートル・高さ4メートル、前方部長さ11メートル・高さ2メートルあります。盗掘・学術調査がいっさい行われておらず、残存状態が極めて良好な学術的価値の高い文化財で、昭和52年に国指定史跡にもなっています。

毎年地元住民により川柳将軍塚古墳と一体で下草刈り等の手入れがされていて景観に優れており、小学生や社会人の散策等多くの方が訪れています。



荒堀の 雨降り地蔵



篠ノ井杵淵の荒堀公民館
の中にあるこのお地蔵さま
は約200年前に千曲川の
増水によって流れ着いたと

伝わっています。雨乞いの靈験あらたかで、千曲川に漬けて3日のうちには必ず雨が降ったそうです。一度だけ3日過ぎてもそのままにしておいたところ大雨となり、千曲川が増水してお地蔵さまが流されてしまったことがありました。それ以後たとえ2・3滴だろうと雨が降れば必ずお地蔵さまをあげるようになりました。

雨乞いの際にはお地蔵さまを縄で縛って背負い、鉦叩きを先頭に「雨降らせ給へ」と唱えつつ集落内を回り千曲川へ向かいました。途中からは村人も加わって賑やかに行われていたようです。



柴オンベ



オンベ(またはボウス)は松代町柴区で毎年正月の終わりのどんど焼きに合わせて行われている、非常に珍しい行事です。

神棚に供えてあった古いお札を子どもたちが中心になって集めて回り、それをどんど焼き前にボウス状にします。これを持って祭典部の皆さんが「シメレヤー、シメレヤー」と言いながら柴区の家々の玄関などでボウスを振って厄払いをします。終わるとボウスをどんど焼きに集められた門松の中心に据えて焚き上げます。ボウスに火がついた時「シメレヤー、シメレヤー」と言いながら皆で今年の繁栄を願います。



中村神社



松代町西条にある中村神社は、延喜式の中に記録のある式内社です。昔はもっと山の上の「宮の平」にありましたが、人々が山麓に住むようになりお宮も現在の場所に移されたようです。

お宮は永禄年間に戦により焼失した後、永禄12年(1569)に再建されており、西条見作守祐直及び村衆中が再建するという意味の棟札が今も保存されています。また、最近では平成15年に鳥居が西条出身者によって再建されています。

古来、中村神社は水神・農業の神として、後世は武神としても崇敬されました。天児屋根尊あめの子やねのみこと、大國主命おおくにぬしのみことなど多くの神々が祀られ、10月中頃には山の神祭りがあります。



滝本一本杉



松代町東条地区を奇妙山方面へと進んでいくと、清滝とその傍らに清滝阿弥陀堂があります。清滝は落差約30メートルで水量は少なく、枯れることはありませんがシャワーのように水しぶきが落ちる滝つぼのない滝です。ここは景勝地でもあり、武田信玄と上杉謙信の決戦の地となった妻女山、茶臼山、川中島が一望できます。

また、阿弥陀堂東側の参道跡には杉の叢林があり、中でも最も大きなものは樹齢約400年・幹周り4.9メートル・樹高26メートルあります。これは町内の杉としては最古のものであり、地区の歴史のシンボリックな存在となっています。



関山仙太夫



せきやませんだゆう

関山仙太夫は江戸時代後期(1784~1859)の松代藩士であり、囲碁の腕前が江戸時代アマチュアとしては日本最強とされています。

7歳から囲碁を始め、14歳の頃松代から江戸へ行きプロの本因坊家に入門、18歳で初段を取得します。その後希望した5段の免許が与えられず、生涯初段で通しましたが、当時の番付を見ると6段と4段の間にランクされているものもあり、実力5段がなかば公然と認められていたことがわかります。嘉永4年(1851)、68歳の時に若手最強の本因坊秀策を招き、松代城下の旅籠梅田屋で20日間連続して対局しています。

平成16年に関山仙太夫顕彰会が発足し、毎月記念碁会と子ども囲碁教室が、毎年命日の9月6日には追善囲碁大会が開催されています。



西寺尾ケヤキ



松代町西寺尾にある頤気神社は延喜式に掲載されているといわれている神社です。幾度かの火災・水害に遭い、現在の社殿は文政三年(1820)に造営されました。

その境内には多くの古木が茂っており、そのうち9本のケヤキは長野市による保存樹木の指定を受けています。その中でも神社の拝殿東側にあるケヤキは樹齢推定600年から700年で、幹周り約8メートル30センチ、樹高約3メートルもの大木です。根元で二本が合体しており、氏子の皆さんにご神木として拝みたてまつられています。

